

Title	現代中国における「茶文化」の出現と創造：1980年代を中心に
Author	王 静
Citation	都市文化研究. 15 卷, p.28-39.
Issue Date	2013-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171213-070

Placed on: Osaka City University

現代中国における「茶文化」の出現と創造

—— 1980年代を中心に ——

王 静

◆要 旨

本稿は1980年代を主な対象に、現代中国における「茶文化」がどのように出現し、いかに創造されていたのかを明らかにする。はじめにの部分では、現代中国における茶文化の復興にともない、茶文化研究が盛んにおこなわれるようになってきたものの、いまだに茶文化の出現と初期段階の創造が解明されていないことを指摘する。第2節では、新中国30年間の茶生産に焦点を当て、1980年代における「茶文化」の出現との関連を示す。茶の生産に重心が置かれたその時期に、茶はソ連からの借款の返済と工業化国家建設にとっての重要な物資として位置付けられ、社会主義建設という革命性をもった「政治性」の強いものであった。さらに文化大革命の影響で飲茶が打倒されるべきブルジョアジーの享楽行為とされていた。それゆえに1970年代半ばから茶生産が恢復されたものの、国内における飲茶が提唱されてこなかった。そのような背景の下で「茶葉問題」が発生した。第3節では、「茶葉問題」を考察し、その解決策として国内市場の開発がはかられたこと、そして飲茶習慣を蘇らせるために茶の「文化」的な側面に注目が集まり、それが茶文化の出現を後押ししたことを指摘する。第4節では茶の専門家である庄晚芳を取り上げ、彼がどのように「茶文化」ということを創り上げてきたのかを、中国初の茶の読本となった『飲茶漫話』を中心に考察する。第5節では、1980年代の茶文化がいかに創造されてきたのかを、テレビ、新聞、科学研究の三つからまとめている。以上、茶文化の出現と創造を明らかにした上で、1980年代における中国の茶文化という伝統の創造は、あくまでも経済発展の一手段であったことを結論とする。

キーワード：現代中国, 1980年代, 茶文化, 伝統の創造, 茶経済

(2012年9月7日論文受理, 2012年11月2日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

1 はじめに

今日の中国においては、茶が国の飲料である「国飲」に位置付けられ、茶文化が優秀な民族文化の一つとして国内外に向けて推進されている。2008年に北京で開催された中国初の夏季オリンピックでは、開会式における中国文化を彩る「燦爛文明」のひとつとして、「茶」という漢字¹⁾が鮮明に提示されていた。また、2010年の上海万国博覧会においては、「連合国連合館」の中に「中国茶展示区」が設けられており、商品としての茶を世界に発信するだけでなく、一連の茶文化活動、中でも特に参加者が100以上の国や地域におよぶ“世界和諧茶会”²⁾の開催を通じて、文化としての中国茶が世界にアピールされた。

茶は、このような国家の大型イベントはいうまでもなく、国民の日常生活の隅々までにかかわっている。現在、国内では年間およそ110万トン³⁾の茶が消費されており、10万軒以上の茶館（中国式のティーハウス）が全国各地の街中にならんでいる。ほとんどの都市に「茶城」、「茶市場」のような大型販売センターがあるほか、小型の販売店をあちこちに見かけることができる。そして、多くの都市では年に何回か茶文化イベントが開かれている。教育の分野では、小学校、中学校、高校に茶文化の授業が開設され、大学には茶文化専攻のコースまで設置されるようになった。家庭においては、一般的に茶は個人や家族を癒し来客をもてなすものであるが、情報化の急速な発達の中で大量の茶文化番組やコマーシャルが家庭に入り込んでくることで、茶の影響がより強くなったとい

えよう。

人々の生活はいつでもどこでも茶と緊密に結んでおり、そのうえ中国を原産としてその栽培や飲用最古の歴史を持つ由緒のある茶は、正真正銘の中国「国飲」であり、茶の文化も誇りうる一つの優秀な民族文化であろう。それをさらに根拠づけているのは、ここ20年余りの学術研究である。1990年代以降、史料に基づいた茶文化の歴史的研究、そして産業論・政策論・文化論を中心とした今日の茶文化に関する研究が盛んにおこなわれており、多くの成果が蓄積されてきた⁴⁾。それらは大まかに、神農が茶を発見した伝説から清朝までの歴史を扱うものと、改革開放政策が提起した1978年以降の茶文化の展開を捉えるものとの二つに分けることができるが、それぞれが中国茶文化の悠久の歴史と今日の繁栄を学術の力で保証しているのである。

しかし、「あの物資が乏しい時代に、100グラムの茶が買えるのは何よりの喜びだった⁵⁾」というある中国人の記憶や、「70年代に中国を旅行していた時に、人々が飲んでいたのは茶ではなく白湯だった⁶⁾」というある日本人からの指摘のように、ここ何十年前の中国における茶の状況は今日と大きなズレがあるようだ。そうすると、現在の中国茶文化はいつ出現し、どのように今日のような状態にまでたどりついてきたのか。これらの疑問は、歴史学者や文化研究者、あるいは中国の近現代史をすこしわかる人なら直ちに抱くものであろう。しかし残念ながら現存の中国茶文化研究からはまだその答えが出ていない。厳密に言うと、答えが出ていないのではない。従来の研究は建国から1978年までをほとんど扱っておらず⁷⁾、そのあたりの問題を全く見逃しているのである。

そこで、本研究では、この課題の解明を目指すべく、現代中国において、茶文化がどのように出現し、いかに創造されてきたのかを明らかにすることを目的とする。結論をさきに述べると、このあたかも何千年前の遠い昔から受け継がれてきた伝統であるかのように見える現在の茶文化は、イギリスの歴史家ホブズボウムの『創られた伝統』（ホブズボウム・レンジャー 1992 [1983]）に代表される「伝統の創造」論に当てはまるもので、実は現代中国の国家づくりの中で新たに再構築されたものである。当然ながら「茶文化」ということば自体もその流れの中で創造されたものにすぎないのである。

これまでの中国茶文化に関する研究は、「中国茶文化」を新しい言葉と認めてはいるものの、「その内容は現在新たに発明したものではなく、古い客観的存在」（王 1992：4）だと捉えるような見方が典型的である。つまり、茶文化を中華民族固有の古い伝統として今日もそのまま受け継がれていることを前提で議論している「古典的静態的な文化モデル」（西川 1995：117-122）に陥っていると云わざるを得ない。しかし、文化を対象とする

近年の研究の多くは、文化が不変・固有の存在ではなく、そのときどきの政治的経済的状況のなかで、さまざまに構築され、操作されるものであることをあきらかにしてきた。本研究もその方向性を共有し、茶を飲むという飲茶行為が、現代中国の茶文化へと構築、再編されていく過程を跡づけていく。

本研究は1980年代を時代の対象として取り上げなければならない。1980年代とは、それまで新中国30年間（1949～1978）における階級闘争が終わり、政治主導の時代から経済発展を中心とする時代が変わる時期である。その時代変化にともない、社会の中心である経済発展を支える両翼として科学技術と文化が注目されるようになるが、特に政治闘争の時代に「否定」されていた文化が重要な役を演じるようになっていった。そのような時代に、「茶文化」という用語がその初頭に生まれ、現代茶文化の「復興」がスタートしたと論じられてきた。

たしかに、茶文化が出現したのは1980年代初頭であった。しかし当然ながら文化は一夜にして生まれてくるものではない。そこで、これまで研究されてこなかった新中国30年間の茶の状況を把握しなければならなくなる。その間の資料がほとんど公開されていないという難関がある中、収集できたものに基づいて⁸⁾、次節では、新中国30年間における茶の生産を概観する。

2 新中国30年間における茶生産

茶の歴史において、特に17、18世紀に中国は世界の茶の市場を独占していたほど（庄 1988）、茶の生産と輸出のどちらにおいても絶対的に優位な地位にあった。しかし、19世紀に清朝が列強に侵略され、中国が半植民地化されるにつれ、中国はその優位を失っただけでなく、茶業自体が衰弱していた。特に日中戦争と国共内戦の打撃の末、新中国の建国前になると、生産と輸出の両方ともすでに崩壊状態に陥っていた（陳 1984：497-501）。建国の1949年に、大規模な茶園が荒れ果て、生産量はわずか4.1万トンで、日中戦争前の最高生産量の18%に止まり、輸出も0.75万トンという極限にまで衰退していた⁹⁾。

建国当初、新中国の国家づくりの当面の任務は国民経済の復興であり、その中でも国民に十分な食糧が供給できるように農業の生産を回復させることが第一であった。当時、農作物の耕作面積、農具、肥料などが限られており、普通であれば茶の生産は二の次になるものと推測される。なぜなら国内外における中国の茶の事情に関していえば、当時、国民は飢餓に晒されていたため国内における茶の需要は急増しないと予測できるし、国外ではアメリカをはじめ国連加盟の各資本主義国が対中国貿易を封鎖しており（石川 1964：274）、茶の輸出がさほど期

待できないと考えられるからである。

しかし現実には、茶の生産は二の次に回ることなく、新中国政府は国家の成立とともにいち早くその恢復に力を入れることにした。建国祝典よりも早くの10月26日から11月11日まで、半月にもわたる期間において、中央財政経済委員会が茶の生産と販売に関する全国会議を首都北京で開催し、中国茶の復興問題を検討した¹⁰⁾。会議の後に、国家貿易部と農業部がともに1950年における具体的な茶の経営に関する計画書を作成した。同年の12月に北京で全国の茶の生産・買付・加工・輸出および国内販売のすべての業務を統括する国営の茶葉¹¹⁾公司—“中国茶葉公司”が設立され、茶学者であり当時の農業部副部長の呉覚農が総経理の兼任に任命され、翌年の1950年に全国における茶の主要生産地に計21の茶工場が設置された。これらの取り組みからは国家が茶の生産を重視したことが窺える。

政府の関与は、単に会議を開き、組織をつくり、形式を整えるだけではなかった。新中国政府は茶の生産を国家の農業生産恢復の重要な一部分として国家の生産計画に取り入れ、各年度の生産計画を中央で決めていた。たとえば、1952年2月に公布した「国務院の一九五二年の農業生産に関する規定」¹²⁾において、1951年を基礎に食糧の増産パーセントを明確に要請し、茶については、「計画生産量の完成もしくは超過をかちとり、かつ品質向上のために努力しなければならない」と明記している。そして毛沢東が起草に参加したとされる第一次から第三次五ヶ年計画の間の農業発展綱領である『一九五六から一九六七年までの農業発展綱要』¹³⁾において、食糧とその他の農作物の産量の増加に力を入れ、「国家が定める紡績原料、油料、糖料、茶、煙草、果物類、薬材など各項目の指標を達成しなければならない」ことが示された。茶の生産は国家的な任務として完成しなければならない課題とされたのである。

国家的任務としての茶の生産を確実に成し遂げる鍵は生産に対する指導の強化とされ、各級地方政府に徹底的な指導の責任と任務が与えられた。たとえば、上述の1952年の農業生産規定に定めた増産任務を完成するために、省以下の各級人民政府は、農業生産の指導を年間を通じて第一義的任務としなければならないとされた。茶の産地における国の方針・計画の実施を指導する以外に、茶産地の各地方政府には、現地の状況に基づいて茶の生産発展に関する計画を作り、それを実現させる生産方針と具体的な政策および技術措置を研究することなど、具体的な指導内容が国から指示された。さらに、春季・夏季・秋季の茶の収穫季節に近付くと、収穫と買付の計画目標を完成させるために、国が当年度の事情によって、茶摘みの時期・方法・人員配置、茶の品質管理の方法など詳細な指導任務を出すことになっていた¹⁴⁾。

国家の生産計画と徹底的な地方政府の指導のもとで、国を挙げて茶の生産に取り込んだ結果、茶園が開墾され、1949年に15.5万ヘクタールしかなかった茶の栽培面積が、1959年に40.5万、1975年には87.2万、1976年には96.3万、1977年には101.4万、1978年には104.7万ヘクタールまでになった。つまり30年間に89.2万ヘクタール増加し、およそ7倍に拡大したのである。生産量は1949年の4.1万トンから、1959年に15.2万、1975年に21.1万トンになり、スリランカを抜きインドに続く世界2番目となり、日中戦争前の最高生産量であった1932年を上回り、茶の生産恢復という任務が果たされた。それでは、食糧の自立問題さえも解決できていない建国当時から、食糧生産と並行して茶の生産を国家づくりと同調させなければならなかった理由はどのようなものであったのだろうか。その理由はひとことでは「革命」のためであった。中国は社会主義工業化国家の実現を国家建設の目標として定めていた。工業が衰弱している新中国では6億人の人口のうち5億が農村人口であったため、工業を発展させる上で必要な原料や食糧は、農業の発展を通してしか得ることができなかった。しかも工業商品の消費市場、必要な労働力の提供も農村にしかない。それゆえに、工業化の実現という社会主義革命実現のためにはまず農業が貢献しなければならないのである。茶は中国の主要な農業経済作物の一つであり、「茶の生産を発展させるのは、国家の社会主義工業建設に対する支援」(『四川茶葉』編写組 1977: 8)として位置づけられていた。

茶の社会主義革命に対する支援とは、主にバーター貿易を通して茶を工業生産の材料と交換することである。そのバーター貿易の最も重要な相手国はソ連であった。1950年代初期、それまで茶の主な輸出先であった資本主義各国が対中貿易を封鎖している中で、主な輸出先は建国当初中国と友好関係を結んだソ連となり(陳 1984: 502)、中国は茶を以てソ連の重油、ガソリン、灯油と交換していた¹⁵⁾。

このような状況の中でとくに注目しなければならないのが、中国とソ連の借款協定である。1950年2月14日、中国はソ連と借款供与の協定を調印した。当協定の内容によると、1950年から1955年の五年間でソ連が中国に年間5千万ドル、総額3億ドルの借款を与え、中国は1954年から1963年までに、原料、茶、現金、米ドルなどによって借款および利息を返済する¹⁶⁾。この協定は中国とソ連の貿易を拡大させて行くことになったが、同時に、そこでは茶が主要な返済物資として指定されることで¹⁷⁾、社会主義革命に支援する茶の性質が明確に示された。中国が主に生産している緑茶とは異なり、ソ連が消費するのは主に紅茶であった。良質の紅茶をソ連に供給できるように、中国の農業部と貿易部は、従来の紅茶産地の生産指導を強化する一方で、一部分の緑茶産地に紅

茶を生産するように要求した。緑茶から紅茶に変更するには、茶葉の生産自体はほとんどおなじであっても、加工機器の変更や技術の訓練などをしなければならないため容易なことではないが、ソ連に返済するために紅茶の生産拡大に踏み込んだ。各級政府が指導を強化するとともに、産地の茶農も緑茶を紅茶へ変更する政府の呼びかけに協力したため、1953年の紅茶輸出量は1950年の3倍以上となり、1950年から1957年までの茶の輸出額はソ連の借金返済額に近い2.84億ドルにまでなった¹⁸⁾。実際、1949年から借款の返済が完了する1960年まで、中国はソ連に132907トンの茶を輸出し、総額1億9809万ドルにも達しており、借金返済の大半が茶によるものであったことは確かであろう¹⁹⁾。

新中国においての茶は、社会主義革命に巨大な力を注ぎ、特に輸出を通して国家づくりに貢献してきた。当時、茶の収入は常に鋼材やトラクターや鋼管工場などに換算され、茶生産の意義を国家建設と結び付けて示すことで、さらなる増産が呼びかけられた²⁰⁾。

このように、新中国においては、茶は工業化建設にとっての重要な物資であり、茶の生産が社会主義革命に支援するという意味で「政治性」を強く帯びていた。それゆえ、その当時の茶に関しては生産のみが強調されていた²¹⁾。1970年代末まで、茶は輸出と外交用や特別接待用に優先的に振り分けられていたため、国内における茶の供給は限定的かつ計画的におこなわれていた。そもそも茶の生産を回復させた大きな要因の一つがソ連の借款返済の指定品であったことや、茶が国家建設にとっていかに重要であるかが示されている中で、茶は生産者や一般の国民が気軽に飲用できるものではなかった。さらに文化大革命の間に飲茶は資産階級の“享楽行為”として攻撃され、茶館は悪者を隠蔽する場所として取り締まりの対象にもなった（劉 2007：100）。新中国においては飲茶が提唱されず、茶は国民的な飲物にはならなかったのである。

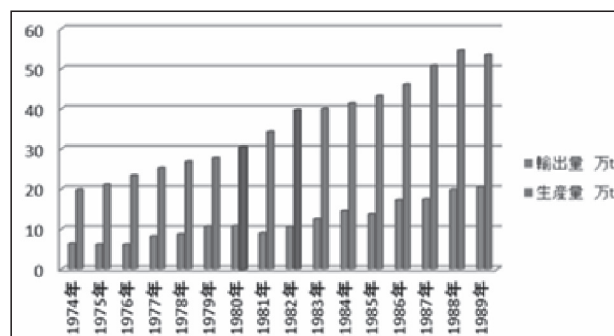
3 「茶葉問題」の発生

1970年代後半まで中国国内における飲茶は提唱されてこなかった。その間における茶生産の回復が茶の圧倒的な不足の歴史に終止符を打ち、その後の「茶文化」の出現および今日の「茶文化」復興への土台を築いたのである。しかし、茶生産が回復された1970年代後半、そして文化大革命が終焉したすぐ後にも、国民の間に茶の飲用が一気に展開するというにはならなかった。「茶文化」の出現を後押ししたのは、1970年代末から1980年代初めに起きた「茶葉問題」だと考えられる。

「茶葉問題」とは、1970年代末から年々茶の生産量が

増加する中で、茶葉が国家の倉庫に保管されたまま出荷できずに変質してしまうような事態に至ったことを指す²²⁾。茶葉問題が生じた原因の一つは1970年代後半の茶の生産量の増加による「生産過剰」である。茶の生産のさらなる発展を目指して、1974年3月に北京で“全国茶葉会議”が開催された。当会議において、当時中央政治局で農業を担当していた華国鋒が茶生産の発展のさらなる速いスピードが必要だと説き、茶の増産任務と措置が検討された。華国鋒が、「年間生産量2500トンの基地を全国で100カ所を建設する」²³⁾ことを指示し、そこから茶の生産が急スピードで拡大する。1974年に20万トンに至らなかった生産量は1978年に26.8万トンとなり、1980年にはさらに30万トンを超過し、1982年に約40万トンに近づいてきた。1974年から1982までの8年間に倍増し、特に1980年から1982年までのわずか2年間には10万トンも増加した。生産量の急増に対して、これまで新中国が最も優先してきた輸出量については、1974年に比較すると、1982年は6.4万トンから10.6万トンへと、約6割も上がったが、その数値はわずか4万トンで、その間に増加した20万トンの生産量の1/5にすぎなかった。さらに80年代の最初の2年間において、輸出は約2万トンの減少も見られた（図1を参照）。つまり、輸出量の増幅は生産量と比例せず、生産量と輸出量との間に差が一気に大きくなった。このようにして急増してきた茶の在庫が処理できないことが「茶葉問題」の発生を招いた。

図1 茶の生産量と輸出量の推移1974—1989



しかし、「茶葉問題」を単純な「生産過剰」としてのみ考えることはできない。当時の中国は計画経済体制であり、茶の生産、買付、販売のいずれも国家の統一的な計画と管理に基づいておこなわれていた。国家が全国における年間生産量と買付量を計画し、それを詳細に各級政府が所在地域に生産任務として与える。それを受けて個人生産者や国営の茶農園は作った茶を国家に出荷する。その上で国家が買い付けた茶を輸出用、外交や接待などの特殊供給用にまず割り振ってから、残りを国内販売に回すという仕組みである。しかし、この国内販売も厳しく規制されていた。都市部の経済的に余裕のある家庭で

すら国が頒布する「票」（配給切符）がなければ、自由に茶を購入することができなかった。それまで茶生産の恢復と輸出に力を入れ、国内市場を規制していたため、国内における自由な流通と販売のシステムが形成されていなかった。そのため、1970年代末から1980年代初めに、突然大量に溜まってきた茶を、国家の倉庫から出して国内で販売しようとしてもすぐには実行できなかったわけである。

国内の流通販売の問題を意識した国は、国内販売を緩和するために、1982年12月、農産物に対する統一的な買付・販売政策を調整し、市場に基づいて適切な調整ができるような政策を打ち出した²⁴⁾。1984年6月に国務院が「茶の販売を拡大し、継続的な発展を促進する」ことを目的に、「茶の買付・販売政策の調整と流通体制の改革の意見に関する報告」²⁵⁾を公布し、生産地における茶葉市場の建設や多様な流通方法を組織するなどの方法が提案され、国の計画に基づいた買付と販売政策を停止し、茶の国内と輸出の市場を一般に開放した。経済発展を中心とした改革開放初期の1980年代におこなわれたこのような体制改革は、茶葉経済を市場経済に乗せて、継続的な発展を図ることを目指すものであった。

茶葉経済を発展させ、茶葉問題を解決する一つの方法は、国際市場をさらに開拓し対外輸出を拡大していくことである。それに関しては、輸出量が1980年の10.7万トンから1989年の20.4万トンまでに倍増したことにくわえて、1980年代の世界における19.79%²⁶⁾という茶の貿易増加率をかなり超過しており、中国の茶の経済発展に大いに貢献したといえる。しかし1980年代において、インド、スリランカという茶の生産および輸出の二大国の輸出量も、それぞれ20万トン前後（21.7万トンから17.4万トン）²⁷⁾の水準を維持したままであり、中国が国際市場において大きくシェアを伸ばすことはあまり期待できない。

対外輸出以外に茶葉経済を発展させるには、国内市場を創出しなければならない。1984年に国家は茶の国内市場を開放し、流通と販売システムを整えた。しかしハード面における施策だけでは国内市場を開くのはおよそ不可能である。なぜなら、前節で述べたように、新中国30年間においては、茶の飲用が提唱されなかったからである。列強の侵略や日中戦争などで、中国の人々は百年以上にわたって苦難な生活を余儀なくされ、日常生活における飲茶の習慣はその間に「中断」したのである。したがって、「茶葉問題」を解決し、国内市場を作るための鍵は、この断絶した飲茶の習慣をいかに蘇らせるかということであった。そこで、飲茶の習慣を蘇らせるために、国は茶生産の恢復時期に発揮した「政治」の力とは異なるものとしての「文化」の力に戦略を移行させた。国家農業部が茶の専門家たちの協力を求め、彼ら自らが飲茶

という「伝統」の構築に乗り出したのであった。

4 「茶文化」ということばの出現

文化の側面から飲茶の習慣を蘇えらせるために、国はまず飲茶の知識を普及することから着手した。国家農業部は1979年に一般読者向けの茶の読本の発行を企画し、その執筆を当時浙江農業大学茶学学科の教授を務める庄晚芳に依頼した。庄晚芳（1908-1996年）は、中国の茶学泰斗と言われる人物で、茶学者、茶学教育家、茶樹栽培専門家として茶樹の生物学に関する研究成果を多くあげていたが²⁸⁾、1970年代末以降は研究の重心を歴史や文化論に転換していた。

庄晚芳は農業部の依頼を受け、3人の同僚と共同で中国茶読本一『飲茶漫話』を編著し、1981年11月に出版した（庄1981）。その本は「あとがき」を除くと、八章で構成されている。一章「飲茶の歴史」では、飲茶の起源と国内外への広まりを通時的に述べている。二章「飲茶と健康」では、茶の成分と薬理的効用を図表で紹介し、5項目に分けて保健と治療の作用を説明している。三章「飲茶の風習」では、客のもてなし、茶宴・茶会・茶道、茶館・茶室、茶話会の四つの側面から日常の飲茶風習を述べている。四章「飲茶と文芸」では、多くの事例を取り上げながら、茶と詩、茶と美術、茶と民謡について紹介している。五章「主な茶の飲み方」では、歴史上の茶の入れ方を概要した上で、紅茶・緑茶・烏龍茶・花茶・タン茶などの当時の世界中の茶の主な入れ方を紹介している。六章「茶の入れ方の要点」では、水、茶器の選び方を説明した上で、用水量・水温・入れる時間を茶の種類に応じて詳しく説明している。七章「茶の種類と買い方」では、茶の種類毎に代表的なものをあげながら、形色、香り、味などから茶の特徴を説明した上で、外見・香気・滋味・液色・出殻という購入する際の五つの要点を挙げている。八章「茶の保存」では、歴史上の保存方法を紹介し、家庭での少量貯蔵の場合と大量の茶の包装と貯蔵の場合に分けてそれぞれに適した方法を説明している。本書を通して茶の飲用の歴史や日常の中での飲用方法などが系統的かつ一般向けに紹介されており、図表を用いたり簡素な表現を心がけたりするなど、読みやすい配慮が行われていた。『飲茶漫話』が歴史上における飲茶の紹介だけでなく、家庭を対象に、茶の選び方、入れ方と保存方法などを中心に紹介していたことを考えると、この本の出版に、国民に飲茶の知識を身につけさせ、茶の飲用を喚起する意図が込められていたことはあきらかであろう。

内容以外にも本書が出版されること自体が画期的な意味をもっていた。なぜなら、建国後から1980年まで中国

では茶の栽培、加工、豊作経験などを中心に200冊²⁹⁾以上の専門書が発行されてきたが、その中には飲用に関するものがなく、『飲茶漫話』は文化の側面から書かれた中国初の読本であるからだ。そして、『飲茶漫話』は初版の発行部数が4万5千部であったが、その数は翌年と3年後に出版された文化的な面から茶を論じた本の発行部数のおよそ3倍から10倍であった³⁰⁾。この本が当時同じ系列のものとは比べて、大量に市場に投入されたことにも、国民向けに茶の飲用に関する知識を普及しようとする国家の姿勢がうかがえるであろう。

一般的に、社会における文化の形成は創造側と受容側との共同作業である。『飲茶漫話』は人々の興味を強く引き、中国国内で愛読され、それ以降の中国における茶に関する宣伝の基本的な枠組みを提供した（梅 2006）。さらに、「中国茶の発達の経過や現況を伝える最も新しく、かつ手ごろな教科書的内容である」（松崎 1985：1）とされ、出版して2年後には財団法人静岡県茶業会議所の定期刊行物である『茶』に3年にわたって日本語訳が連載され、のちに単行文として出版されるほど、国外においても反響を及ぼした。

文化の創造という観点からみると、『飲茶漫話』の出版に関して最も興味深い点は、同書が「茶文化」ということばを創り出したことである。飲茶の習慣は中国において長い歴史を有しているにもかかわらず、「茶文化」という用語は存在していなかった。庄晩芳が1980年9月に書いた同書の「あとがき」に「茶葉は我が国にその起源をもつ。飲茶文化はわが国の全体の民族文化の精華の一部であり、またこれはわが国の人民が人類にたいして為した貢献の一部である。したがって祖国の飲茶文化を紹介することはきわめて有意義なことと考える³¹⁾」との一部分がある。ここで「飲茶」に「文化」をつけ、初めて「飲茶文化」という言葉が生み出された。この「飲茶文化」は松崎訳の日本語版において、「茶の文化」と表記されているように、現在使われている「茶文化」という語とほぼ同様だと思われる。したがって、「茶文化」ということばがここから誕生したといえることができるのである。

「飲茶文化」とほぼ同じ時期に創造されたのは、「茶葉文化」という用語である。1980年12月、香港鏡報文化企業有限公司が同社の『鏡報』³²⁾（月刊）に1979年4月から掲載していた陳彬藩³³⁾の24篇の中国茶に関する文章を『茶経新篇』と題して出版した。著者陳彬藩の師である庄晩芳と王澤農（当時の中国茶業学会理事長）は、1980年10月に共同の署名で『茶経新篇』の序文を書いている。その中で二人は、陸羽の『茶経』を高く評価した上で、それに続けて「今日、茶葉の生産と対外貿易の迅速な発展にともない、茶葉という商品はまた国内外の友誼と文化交流を促進する架け橋となっている。国外の友

人と海外の同胞、特に茶葉の愛好者らが中国の茶を飲用する際に、悠久な歴史をもつ中国茶葉文化にあこがれをいただき、中国茶葉の歴史と現状を詳細に紹介した新作を渴望している」と、本書の出版背景を説明している。さらに本文の内容を紹介する部分では「国内外における茶葉文化³⁴⁾の交流と伝播」（陳彬藩 1980：3-4）とも書いていることから、ここで使われた「茶葉文化」という語も今日の「茶文化」と同一視できるとと思われる。

「飲茶文化」と「茶葉文化」は、中国語の表現での些細な違いがあっても、その用法や意味は、現在の「茶文化」と同様である。1980年に二つの言葉が生まれてきたことは、「文化」の力が国内の茶葉問題を解決する一策となることを予感させるが、これらの言葉の誕生は、それ以上に現代中国の「茶文化」創造の幕が大きく開いたことを意味しているのである。

「茶文化」という言葉を創造した庄晩芳は、茶文化は茶の物質文化と精神文化の双方の内容によって有機的に構成されるとの考えを提示した上で、中国建国後は生産と科学研究という物質文化の側面では確実に実を結んできた一方、精神文化の側面については相応しく発展できず、少なくとも1978年までは重視されることがなかったと指摘している（庄 1987）。庄は茶文化の全体的な発展の必要性を訴え、一連の茶文化活動を展開し、茶文化の構築に取り掛かった。庄が「満腔の熱意で茶文化を宣伝」（梁 2007：453）し、茶業界に呼び掛けたことで、1982年に杭州市で茶界を連携する民間団体—“茶人之家”の設立に向けての準備が始められた。“茶人之家”はその趣旨を「茶葉科学技術の普及、茶葉文化の宣伝、国内外の茶葉学術交流の展開、茶葉生産と貿易の促進、物質文明と精神文明の向上、茶葉の対外宣伝の拡大、華僑・香港・マカオ・台湾同胞と茶界同士の連携、台湾の祖国回帰の促進」という点に定め、浙江省茶業会社の附属機構となり、準備段階の経済的、人的協力を得た。正式な成立は1985年であったが、すでに準備段階から茶業界を集めた茶会を開いたり、機関誌の創刊号を発行したりして、茶文化活動に取り組んでいた³⁵⁾。1985年3月から機関誌『茶人之家』（季刊）を定期的に発行し、「茶と文化」、「国外の茶事」、「茶と健康」、「茶の飲用」、「茶史」などの項目を設け、広く茶文化のテーマを扱う当時あっては国内で唯一の茶文化雑誌として、茶文化宣伝の「陣営」の役を担っていた。

中国初の茶の読本を著して、茶文化を創り上げ、その茶文化を宣伝する団体の成立および雑誌の発行に尽力した庄晩芳は、茶葉経済を促進する一翼として茶文化を利用し、中国が茶の祖国であることや豊かな茶文化を有していることの普及に努めていた。その一方で、彼は、1980年代後半から茶文化は中国の特色のある社会主義国家の建設に寄与すべきものとして、社会主義の茶文

化を新たに構築しなければならないと、全国の茶に携わる人々や社会に期待を寄せていた。庄は新聞や雑誌に論文を寄稿し、社会の文明建設の促進と茶文化昂揚の関係を論じている³⁶⁾。さらに1989年には“中国茶徳一廉、美和、敬”を提起し、それを以て物質文明と精神文明の両方の建設を増進したいと願っていた。

5 茶文化の創造

1980年代における中国の茶文化の創造には、庄晩芳のような専門家が先頭に立って方向性を示すと同時に、社会のさまざまなアクターがそれぞれの役割を担いながら参与してきた。

1) テレビ放送の開始

「茶葉問題」が深刻化する1980年代初頭、国内全土における農業の供給、販売、消費、生産を統一的に管理していたのは、国務院に所属する中華全国供銷合作総社（購買販売協同組合総社）であり、その中で茶を扱うのは「畜茶局」であった。「畜茶局」に設けられた販売部は、当時の茶の販売不振を打破して、国内市場の開拓に極めて重要な役割を担っていた。当時販売部長を務めた張大為は、国家の倉庫に保管したまま変質してしまった茶を国内で販売できるように思案したあげく、全国の茶の生産と調達などの従来の業務内容についてのさらなる工夫に代えて、大衆媒体を通して宣伝すれば茶の消費が引き起こせる可能性があることに気づき、テレビを使う茶文化の宣伝という斬新な方法を考え出した。

張大為が注目したのは中央テレビ（CCTV）の「為您服務」（生活の知恵）という番組であった。80年代の初頭はテレビが中国の一般家庭に普及しはじめる時期で、仕事が終わったあとに家庭でテレビを見るのが流行のライフスタイルだった。その番組は毎週日曜日の夜7時45分から25分間のレギュラー番組として放送され、「テレビの利用常識」や「撮影諮問」などのような日常生活と密接に関係するテーマを扱うもので、「80年代の家庭百科」と言われるほど家庭生活にとって重要なものであった。人々が関心を寄せる日常生活のことをテーマにした放送であったため、番組宛てに毎日大量の手紙が届き（月に最多5000通以上）、それらの手紙から放送内容が製作されることも多く、「庶民自身の番組」として高い視聴率を持っていた。中国中に知れわたっている沈力という1958年に中国で初めてのアナウンサーとなったベテランを番組責任者としてキャスターに任命し、中国のテレビ史上初のキャスター付き番組として登場したことで、当時大きく注目されていた。³⁷⁾

張大為は、「庶民自身の番組」において茶が健康に良

いと知識を普及することを狙って、番組の担当者に働きかけると同時に、茶文化番組を成功させるために自ら茶文化を研究し始めた。1983年に沈力ともう一人の著名なアナウンサーである趙忠詳の協力を得て、「飲茶の学問」、「茶の妙用」、「『茶経』を読む」、「茶と癌予防」、「茶詩、画の香り」など、茶文化を扱った番組が中国のテレビに登場することとなった³⁸⁾。

テレビを利用して国民に茶を理解させ、飲茶を提唱することが、当時の最先端の方法として茶文化宣伝の手本となり、全国各地において次第に飲茶の宣伝活動がおこなわれるようになった（梅 2006）。中央テレビでの放送に続き、より広範な効果を獲得するために、張大為は中国人民ラジオ局にも働きかけ、のちにそれらの番組のラジオ放送も実現した³⁹⁾。

2) 新聞の報道

中国は建国以来、中国共産党の機関紙である“党報”が統治的な地位をもっており、特に改革開放政策以前までは新聞報道を一元化していた。1980年代に商業目的の新聞が大量に出現するにともない、全国の新聞数における“党報”の比重が1/4に減少したにもかかわらず、年間の発行量においてはまだ4割前後を占めており、依然として国家のイデオロギー形成にとって重要な分野の一つとなっている（馮 1994）。“党報”の最も代表的な『人民日報』⁴⁰⁾は中国共産党中央委員会が管理しているもので、中央の精神や政府の最新政策を宣伝したり、国内外の出来事を報道したりしており、社説や評論は国務院の意志の伝達手段となっているほど中国共産党中央機関紙として機能している。中国において発行部数が一番多く⁴¹⁾、最も権威と影響力を持つ新聞とされている。

その意味において、『人民日報』における茶にたいする捉え方は国家の意思そのものを反映していると言えよう。茶生産の回復に国を挙げて取り込んだ新中国30年間の間は、茶は「革命」の為の重要な物資として位置付けられ、生産・買付・輸出についてのみの解説や社説がほとんどであった。たとえば、茶生産が回復した改革開放の前年度の1977年を例にすると、茶を取り上げた15件の記事の中で、12件が豊作や発展のスピードなどが論じられており、「茶生産を強力に発展しよう」のような呼びかけが見られる。国外の事情を紹介した2件は、スリランカとイランの茶工場と茶生産に関するものであり、残りの1件は周恩来総理を偲ぶ内容であった。しかし国家が茶の文化的側面に関心を移し、茶の知識を普及させようとした1970年代末、1980年代初頭から、『人民日報』もその姿勢に同調し、茶文化の創造と普及の一つの陣営として働いた。

1981年から1989年までの『人民日報』における茶に関連する内容をまとめると、茶の生産・買付・輸出などに

関する内容が大幅に減少しており⁴²⁾、最後は2割ほどまでになっている。それにたいして、茶の文化的な側面の内容の割合が大きく増加している。しかも単に記事の数量が増加していただけない。記事の内容は以下の四つの特徴を持ち、飲茶を提唱すると同時に、1980年代の茶文化を推進するものであった。

特徴の第一は、歴史の紹介を通して茶を遠い昔の起源と結びつけるというものである。「我が国は茶の故郷であり、昔からわが国の人民は茶を良い飲料ととらえてきた」(82年4月24日)、「我が国は世界で茶の栽培、製造、飲用において最古の国である」(83年5月2日)、「飲茶は我が国民の伝統習慣であり、今日大多数の人々は、コーヒーでもココアでもなく茶を愛飲している」(84年4月9日)などのように、紀元前の『僮約』にある茶の売買の記録や『本草綱目』に記載された茶の効能、日本への伝播の経緯や陸羽の生涯などが取り上げられた。第二の特徴は、国外の状況を紹介する際には、それまでよく見られた生産状況の報告などではなく、その国や地域における茶の飲用についての内容に変わったことである。しかもそれらの中では中国の茶とのつながりが指摘され、中国の茶が外国に影響を与えたことが示されている。第三に、国内の銘茶の歴史や特色を紹介する内容が登場したことである。そこでは「飲茶が体液の分泌を促進し、のどの渇きをいやし、疲労を回復させ、消化を助け、血圧を下げる効用があり、我が国において茶を愛飲する人がますます多くなってきた」(82年2月3日)というような茶の効用が示され、茶の飲用に関する読者の質問と専門家による回答も現われてきた。第四の特徴は、一度ほとんど消失した茶館や茶室などについて取り上げるようになったことである。文化市場の復興を呼びかけ、中国の特色ある商品文化の構築に茶と茶館に期待が寄せられるなかで、北京の「老舍茶館」などが新たな「文化的」な形として捉えられていた。

3) 研究機関の保証

読本やテレビや新聞などによって、茶の知識を普及させようとするこれらの動きにおいては、いずれも茶の健康作用が強調点の一つとなっている。茶が健康的な飲料であることは中国医学の古典などに裏打ちされている一方、研究機関も科学的研究を通して茶の効用に確実な保証を与えていた。

茶の栄養と薬効成分の研究に取り組んだ研究機関に、中国農業科学院茶葉研究所がある。同研究所は1958年に設立された国家が直接管理する茶の科学研究所であり、茶樹の栽培、改良、茶の加工、茶の品質基準と検査技術など、農業生産、加工科学を中心に研究に取り組んでおり、科学の力を以て新中国における茶の生産回復に貢献してきた。しかし1980年代初頭から、それまでとは異なる

分野の研究を進めていた。1982年に、浙江省商業局の提案と協力のもとで茶に含有する栄養成分と薬効成分についての研究をはじめ、翌年にはその成果が発表された(朱 1983)。その研究報告の中では、茶に含まれるビタミンCやアミノ酸、タンパク質、糖分、ミネラルなどの栄養素や、ティーポリフェノール、カテキン、カフェイン、フラボンなどの薬効成分が分析されていた。茶の栄養と薬効成分を明らかにすることで、飲茶の普及に「健康」という太鼓判が捺されたのである。

それをさらに展開したのは1983年に開催された二つの研究会である。一つは、杭州市内で開かれた浙江省茶葉学会・杭州市茶葉学会の両茶葉学会と中華医学会浙江省分会との共同研究会—「茶葉栄養および薬理作用研究会」である。浙江省内の二つの分野の研究者らが、飲茶が一般的な習慣になっておらず、しかも茶の健康作用がほとんど国民に知られていないという国内の現状にたいして、「飲茶の提唱、身体健康の促進、茶の消費領域の拡大」を図るために、茶葉栄養と薬理作用について議論し、新たに開発した茶商品(アイス、茶酒など)についての意見が交わされた。⁴³⁾

もう一つは、10月5日から10日までに同じ杭州市内で、浙江省科学技術協会が主催し浙江省茶葉学会、中華医学会浙江省分会、中華全国中医学会浙江省分会が共同で開催した「茶と健康、文化学術研討会」である。国家農業部副部長と中国茶葉会社の初代総経理を務めた呉覚農や、庄晚芳のほか、「茶葉文化」という言葉を創出した王澤農も臨席し、全国から茶学界と医学界の90名以上の専門家が集う、初めての全国規模での多分野の学術研究会となった。浙江省の副省長が開会あいさつをおこない、研究会の開催について省が重視していることが示された。研究会では茶と健康、茶の歴史や科学的発展、古代の茶の薬用や現在の臨床応用、茶の飲用や総合利用、茶と茶文化についての発表や討論がおこなわれた。⁴⁴⁾

これら二つの合同研究会は、茶と医学との連合研究を推進し、茶の薬用価値および茶の新商品の研究開発を促す転換点として評価されているが(梅 2006)、1980年代の茶文化の創造という観点からみると、現代科学が飲茶の推進活動の中に関与し、文化と健康の二つが飲茶の中に組み込まれたという点こそが重要であろう。

6 おわりに

本稿は新中国30年間における茶生産を踏まえた上で、1970年代末と1980年代初頭に発生した「茶葉問題」の解決に向けて、「茶文化」という語が誕生し、茶文化が創造されたことを検討してきた。

茶生産は、国家の成立とともに国家生産計画に取り入

れられ、各地方政府が与えられた生産指導を政治的任務として臨んだ結果、食糧生産と同時に恢復した。しかしその時代の茶は、中国の国民的な飲み物にはなれなかった。ソ連からの借款の返済のためにいち早く生産を恢復させ、輸出を通して社会主義工業化国家を築くための工業用材料を獲得しなければならないことから、新中国の茶は、強い「政治性」を持った「革命」のための重要な物資であった。くわえて、階級闘争が激しかった文化大革命の発生によって、飲茶がプロレタリアと相反するブルジョアジーの「享楽行為」とされることで、茶生産が恢復しつつあった1970年代半ばからでも、茶は国民的な飲み物になり得なかった。茶の増産と飲茶の「抑圧」という国策によって達成された茶生産の恢復がのちの茶文化の創造を後押ししたと言える。本稿の意義は、まず、これまで議論されてこなかった新中国30年間における茶生産ならびに茶生産と茶文化の出現との関係を明らかにしたことにあると思われる。

茶生産の恢復と国内飲茶の「抑圧」の相互作用が、「茶葉問題」を生み出した。国を挙げて茶生産を恢復した中国は、経済発展が国策の中心となった改革開放初期において、今度は国内の消費市場の開拓という新たな課題に突入しなければならなかった。そこで、文化という「道具」を手に、中華民族の伝統としての茶文化の再構築に取り掛かった。本稿の二つ目の意義は、茶文化の出現は「茶葉問題」に端を発したと指摘したことにある。それによって、茶文化の出現を国の経済発展の結果と見なすこれまでの経済還元論的な議論が陥った問題点が引き出された。つまり、経済の発展が茶文化をもたらしただけではなく、茶経済を發展させる手段として、茶文化が創造されたのである。

茶文化の創造に着手した中国では、庄晚芳を代表とする専門家たちが先頭に立ち、「茶文化」ということばを創作した。その後、茶文化団体が設立され、全国における茶文化活動を展開していた。そこでは当時最先端の宣伝方法とされるテレビ番組による宣伝が登場した。さらに国内において最も権威のある新聞『人民日報』も陣営に加わり、茶にかんする記事がかつての生産、加工、輸出などを中心とした内容から茶文化へとその強調点が一変した。国民の飲茶習慣を蘇らせることで国内の市場を作り、「茶葉問題」を解決するために始まった茶文化の創造活動において、茶文化が中国伝統文化であることが強調された。現代科学の研究も茶の栄養成分と薬効成分などの研究から茶の健康上の側面を保証することで、国民に茶を飲用することを促した。

本稿は、「茶文化」ということばの出現および茶文化創造の過程を明らかにしてきたが、実際、茶文化活動の展開につれ、1980年代の後半から茶の販売不振が解消され、1989年になると、国内市場では30万トン以上の茶が

消費されることになった⁴⁵⁾。

1980年代における「茶文化」の出現とその創造は、茶経済を發展させる一手段であった。しかし、当初のこの意図はそれが果たされると同時に、茶を国民的な飲み物に広げ、国民文化としての茶文化を創造することになった。さらに1990年代以降には、飲み方などによりいっそうの文化的な要素を含ませた高度な茶文化が創造されていく。その際、茶文化は1980年代のような茶葉経済の一翼としてではなく、中国の総合的な国力を強化するソフトパワーへと活用されていくことになる。同時に本稿の最初にふれたオリンピックの舞台での登場のように、次第に文化ナショナリズムと強く結びつくようになっていく。しかし、本稿で取り上げた1980年代においては、茶文化という伝統の創造のきっかけと意図は、国民国家の統合や民族アイデンティティの構築や確認などというこれまでの「伝統の創造」論の中で議論されてきたこととは異なり、あくまでも経済の継続的な発展にあったことはあきらかであろう。

注

1. 「茶」の字はシルクロードを表す絵巻シーンの中で現れた。開会式で提示された漢字は「茶」と「和」のみであった。
2. 世界和諧茶会は8月6日に「国連館」で開催し、テーマは「友愛・快樂」だった。作法の実演のほか、「理解の茶」・「疎通の茶」・「団樂の茶」・「合作の茶」・「感恩の茶」・「包容の茶」・「分ち合いの茶」・「結縁の茶」・「友愛の茶」・「快樂の茶」・「和諧の茶」という十一の茶を出し、中国茶の「和諧」の精神を演出した。
3. 中国国内における茶の消費量（および予測量）は2011年には110.75万トン、2012年には114.30万トンである。（李・楊 2011：35）。本稿における茶の統計データ（生産量、輸出量、栽培面積）は特別な説明がないものは、すべて中国農業科学院茶葉研究所から得たものを使っている。計算の便宜上、小数点以下2桁で四捨五入の処理をおこなった。
4. 茶文化の歴史研究に関する成果は関劍平がまとめて分析した（関 2001：401-411）。産業論、政策論、文化論に関しては、以下のものが挙げられる（徐 2007; 劉 2003; 范 2000; 王 1992; 姚 1991; 陳 1991）。
5. 「凭票供応」『中華合作時報』2009年9月29日を参照。
6. 著者がある日本の中国研究の学会で、現代中国の茶文化について発表した際に、ある日本人が自身の70年代の中国旅行の見聞をもとに、そのように指摘した。
7. 例えば、1992年出版して以来、6回も増版した『中国茶文化』（王 1992）と、21のテーマにわたって茶および茶文化についての解説する『茶及茶文化 二十一講』（程・姚・張 2010）においても、新中国の茶について言及されており、明清から現在に突入している。大学の茶文化専攻の教科書は（姚 2004：15-89）、現在までの茶文化の歴史を論述しているが、新中国の成立から80年代初期までについては、「新中国成立後、中国の茶と茶文化は幾度の輝きを経たが、幾度の曲折の歴史もあった」と、わずかに1行あまりでおさめている。現在把握している文献の中で、『茶葉通史』が唯一その時代を扱ったものである（陳1984）。
8. 国内の資料に関しては、1949年から1978年までの『人民日報』

- と『参考消息』の内容をすべて確認し、各年度の『国家統計年鑑』からデータを集め、ほとんど絶版となったその時代の茶に関する出版物を中国国家図書館で探して内容を確認した。また香港の『大公報』や日本語の文献も確認した。
9. 1949年の生産量は、『中国統計年鑑-2005』p.477、輸出量は（陳 1984：486）の数値による。
 10. 中国茶の年表（『中国茶大事表』（葉羽晴川 2002：252）を参照。
 11. 「茶葉」は中国語の表現で、文字通り茶の葉を指している。一般的には「茶」と同様に使われているが、1980年代までは「茶葉」が多く使われ、それ以降は「茶」が一般化した。
 12. 日本国際問題研究所・中国部会（1969：389-392）を参照。
 13. 『人民日報』1957年10月26日を参照。
 14. 『人民日報』にそれに関する社説と評論が多く見られる。例えば、1955年3月20日付け「努力發展茶葉生産」1956年6月25日付け「茶葉的采製和收購」1957年3月30日付け「積極増産和收購茶葉」1958年2月17日付け「大力發展茶葉生産」1959年8月2日付け「爭取秋茶大豐收」1960年8月14日付け「力爭秋茶豐産豐收」など。
 15. 香港『大公報』1950年4月10日、「1949年中ソが外交関係を結んだ以来、中央政府の統一な計画と精神に従い、華東地方貿易部はソ連とのバーター貿易を展開した。…第二回目ソ連に運送したのは茶九万担（約4500トン）で、ソ連の重油、ガソリン、灯油と交換する予定である」との記事による。
 16. 日本国際問題研究所・中国部会（1969：58）を参照。
 17. 「対蘇易貨与茶葉産銷」香港『大公報』1950年4月10日
 18. 「茶葉外匯还苏联貸款」『中華合作時報』2009年7月14日
 19. 輸出量と金額の数値は尹（2005）のp.24表をもとに算出した。また、中国茶葉会社の初代総経理を務めた呉覚農の追想した記事にも、「ソ連から借款のかなりの部分は茶で返済した」と書かれている。『人民日報』1990年1月18日を参照
 20. 「積極増産和收購茶葉」1957年3月30日付け『人民日報』を参照。1950年から1956年までの茶の輸出は186万トンの鋼材、あるいは300万台のトラクターと交換でき、茶の総収入は上海と北京を結ぶ鉄道をおよそ10本、あるいはつぎめなし鋼管工場を20建設できる。
 21. 1949年から1978年までの『人民日報』における茶についての報道はほとんど生産に関するものであった。
 22. 「如何看待茶葉産銷矛盾？」1984年4月9日付け『人民日報』を参照
 23. 「多種經營都要高速發展」1978年8月9日付け『人民日報』を参照。
 24. 中共中央文献研究室編（1986：253-269）を参照。
 25. 「關於調整茶葉購銷政策和改革流通體制意見的報告」國務院1984年第75号文件
 26. 数値は趙・水（1994）のp.31表3をもとに算出した。
 27. 両国の1981年から1990年の輸出量の数値の出典は同上。
 28. 庄晚芳は茶樹栽培の理論に関する専門書を多く著している。『茶作学』（1956年 財政経済出版社）、『茶樹生物学』（1957年科学出版社）、中国農業部の委託を受けた高等学校の教科書『茶樹栽培学』（1961年 浙江人民出版社）、ほか多数。
 29. 現存の統計資料はないため、著者は中国国家図書館に所蔵の本をもとに、論文集と雑誌を取り除いて、中国大陸で発行した単行本で統計して、1949年から1980年出版したものは218冊だとわかった。
 30. 1982年に農業出版社が出版した『中国名茶志』（俞 1982）の発行部数は14500部で、1984年に同じ農業出版社が出版した『茶神陸羽』（傳 1984）の発行部数は4250部であった。
 31. 『飲茶漫話』pp.153を参照。原文の中国語を訳す際に、日本語版である『中国茶読本（飲茶漫話）』（松崎 1986：177）を参照した。
 32. 『鏡報』（英語：Tea Mirror）は香港鏡報道文化企業有限公司が1977年8月に創刊した中国語月刊雑誌。政治・経済・軍事・文化などの内容が多く、香港、マカオ、台湾、中国大陸および海外一部分で発行している。
 33. 陳彬藩（1934 - ）は1954年に安徽農業学院茶学学科卒、1980年当時は福建省茶葉学会常務理事を務めている。
 34. 「茶葉文化」ということばは陳彬藩の本文においても何か所出現している。
 35. 例えば、準備委員会が発足してすぐの1982年8月20日に、農業・工業・商業・科学研究・教育に従事する茶学者、浙江省と杭州市の政府関係者らが40人以上を集め、「茶人之家」茶会を盛大に開いた。「浙江“茶人之家”茶会記盛」『茶葉』浙江省茶葉学会1982年第4期p.37を参照。『茶人之家』創刊号は1982年9月に発行した。
 36. 代表的な論文は「發揚茶葉文化，促進文明建設」である（庄 1987）。ほかに、「茶葉文化と清茶一杯」を『光明日報』に掲載したという（梁 2007：454）。
 37. 『中国婦人報』2010年9月28日の記事「沈力：最美不過夕陽紅」を参照。
 38. 第一茶葉ホームページ「張大為：開創媒介宣傳茶葉先河」、最終閲覧2012年8月17日 http://news.t0001.com/2009/0926/article_98749_1.html
 39. 同上
 40. 人民日報（英語：People's Daily）は1948年6月15日に創刊された。
 41. 1979年には600万部、全国で発行している新聞の16.74%を占めていた。
 42. 1981年に26件、全体の52%になり、その後減少が続き、1987年に8件、全体の22%、1989年に6件、全体の21%になった。さらにそれらの内容自体も変化があった。生産に関する内容でも、それまでに茶の増産の強調や強力で茶生産を發展させようといった呼びかけはほとんどなくなっており、買付に関する内容でも、それまでの買付の任務をどこまで達成できたような強調ではなく、その方法や流通の内容にかわっていたと指摘できる。
 43. 「浙江省茶葉学会杭州市茶葉学会連合舉辦茶葉榮養及藥理作用檢討会」『茶葉』1983年第2期p.35を参照。
 44. 「兩個盛會在杭召開」『茶葉』1983年第4期p.51を参照。
 45. 1985年6月に、その年の春季の新茶が完売し、しかも1800トンの在荷がなくなり、販売不振に終止符を打ち、その後の国内市場の活気が予測された。1989年の生産量は53.5万トン、輸出は20.5万トンだった。

参考文献

日本語文献

- E・ホブズボウム、T・レンジャー編 前川啓治、梶原景昭 他訳
1992『創られた伝統』紀伊國屋書店
石川忠雄 1964『中華人民共和国—その実態と分析—』時事通信社
日本国際問題研究所・中国部会編1969『新中国資料集成 第三卷 一九四九年一〇月—一九五二年』日本国際問題研究所
西川長夫 1995『地球時代の民族 = 文化理論 脱国民文化のために』新曜社
庄晚芳等編著、松崎芳郎訳 1985『中国茶読本—飲茶漫画—』静岡県茶葉会議所

中国語文献

- 陳椽 1984『茶葉通史』農業出版社
1991『論茶与文化』農業出版社
- 陳彬藩 1980『茶經新篇』香港鏡報文化企業有限公司
- 程啓坤·姚國坤·張麗穎編著 2010『茶及茶文化 二十一講』
上海文化出版社
- 范增平 2000『中華茶芸學』台海出版社
- 馮媛 1994「80年以來大陸報業的變遷」『當代中國研究』1994
年第3期 pp.21-30
- 傅樹勤 1984『茶神陸羽』農業出版社
- 閔劍平 2001『茶與中國文化』人民出版社
- 梁月榮主編 2007『劉祖生茶學文選』中國農業科學出版社
- 李閩榕·楊江帆主編 2011『茶葉藍皮書·中國茶產業發展報告
(2011)』社會科學文獻出版社
- 劉清榮 2007『中國茶館的流變與未來走向』中國農業出版社
- 劉勤晉主編 2003『茶與旅遊』重慶大學出版社
- 梅峰 2006「談現代茶文化的興起」『第九屆國際茶文化研討會暨
第三屆嶗山國際茶文化節論文集』中國國際茶文化研究會文庫編
委會 浙江古籍出版社 pp.19-24
- 『人民日報』1949年11月1日-1989年12月3日
- 『四川茶葉』編者組 1977『四川茶葉』四川人民出版社
- 王玲 1992『中國茶文化』中國書店
- 徐明宏 2007『杭州茶館—城市休閒方式的社會學分析』東南大
學出版社
- 姚國坤 1991『中國茶文化』上海文化出版社
2004『茶文化概論』浙江攝影出版社
- 葉羽晴川編著 2002『品茶說茶』黑龍江人民出版社
- 尹在繼 2005「中蘇茶葉貿易史(下)」『茶葉經濟信息』中國茶
葉流通協會2005年第10期 pp.21-25
- 俞壽康 1982『中國名茶志』農業出版社
- 趙和濤·水方觀 1994「80年代世界茶葉生產特徵與90年代發展趨
向」『熱帶作物科技』海南省保寧熱帶作物研究所 1994年第4期
pp.28-34
- 中共中央文獻研究室編 1986『十二大以來重要文獻選編 上』人
民出版社
- 中華人民共和國統計局編 2005「主要農產品產量與解放前最高年
產量比較」『中國統計年鑑-2005』
- 庄晚芳等編著 1981『飲茶漫話』中國財政經濟出版社
- 庄晚芳 1987「發揚茶葉文化, 促進文明建設」『茶葉』浙江省茶葉
學會1987年第1期 pp.7-8.
- 朱珩·王月根等 1983「茶葉中營養成分和藥效成分研究初報」『茶
葉』浙江省茶葉學會 1983年第3期 pp.42-45.

The Appearance and Invention of “Tea Culture” in Contemporary China : Based in the 1980s

WANG Jing

This paper clarifies how the “Tea Culture” was produced and invented in contemporary China based in the 1980s. The first part states that with the renaissance of modern tea culture, researches on tea culture have been very popular. However, there is still no clear argument about the appearance of “Tea Culture” and its early stage of formation. The second part summarizes the recovery of tea production from 1949 to 1978. During that period, tea was shadowed by a strong political involvement with the socialist revolution, which accounted for its poor popularity. Thus, under such a background, “Tea Problems” appeared. The third part points out that in order to solve the problems, the government concentrates on the development of the domestic market, and then it reconstructs Chinese habits of drinking tea with a “culture” aspect. The fourth part mainly centers on Chinese Tea Reading written by Zhuang Wanfang, investigating how the phrase “Tea Culture” emerged. Analysis has been made in the fifth part on how tea culture is invented in the aspects of TV programs, news reports and scientific studies of research institutions. At last, the conclusion is drawn that Tea Culture in contemporary China appears because of “Tea Problems”, and the construction is mainly for promoting the further development of a tea economy. That is to say, the invented tea culture in the 1980s is just an approach for economic development.

Keywords : contemporary China, 1980s, Tea Culture, invention of tradition, tea economy